

1996年10月20日発行

大阪府青年国際交流機構

会長 松本 仁孝

遷標



今号の紙面

平成8年度 新組織

日韓親善交流事業レポート

青少年育成交流事業レポート

日中親善交流事業レポート

NO.62

新 会 長 誕 生

大阪府青年国際交流機構の会長が平成8年度より松本 仁孝さんに変わられました。増田さん、お仕事でお忙しい中、会長のお役目大変でしたね。本当にお疲れさまでした。新会長の松本さんも、いろいろな活動を幅広く熱心に行われている素敵なお方ですので、きっと楽しい会になることでしょう。



■ ごあいさつ

松本 仁孝

この度、増田前会長の後を受け会長に就任しました。

「青年の船の会」時代からお世話になり、早15年。その間には、全国大会を主催者の一人として2回経験、また、来月半ばから受け入れる国際協力事業団(JICA)主催の「21世紀のための友情計画」を4回、等々経験してまいりました。

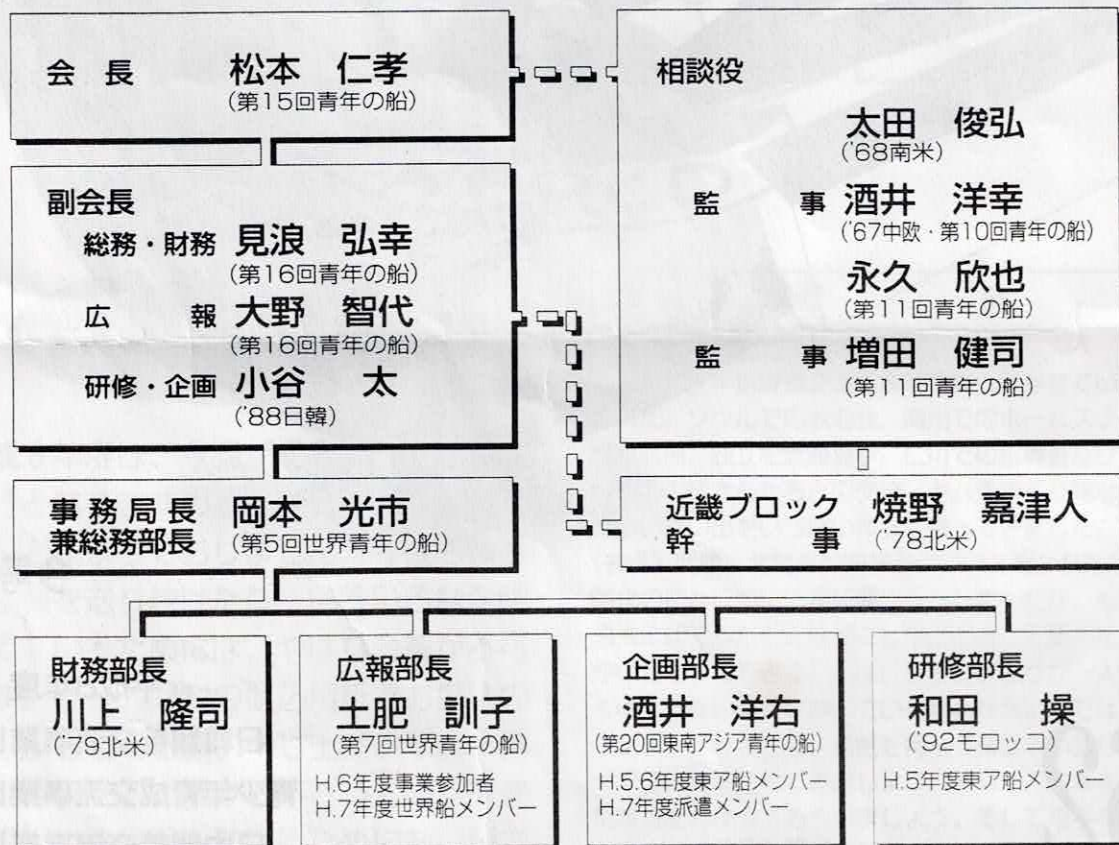
誰もが参加しやすい事後活動を目指すため、従来の役員組織を改善(?)し、複数の副会長を設け、それぞれの副会長には総務・財務、広報、研修・企画部門を担当していただくようになりました。

力不足ではございますが、全役員一同、頑張ってお活動して参りますので、会員皆様のご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。

略歴

1959年3月 大阪市生。
第15回青年の船に乗船後、大阪府派遣(青少年指導者中堅)大阪市(青少年指導者)派遣に参加
現在インターコミュニケーション大阪幹事、大阪市青少年国際交流協議会副会長、95年大阪府知事青少年育成功労賞受賞

1996年度 新役員 組織表



それぞれの派遣事業に参加した人達の帰国報告です。

日韓親善交流事業に参加して

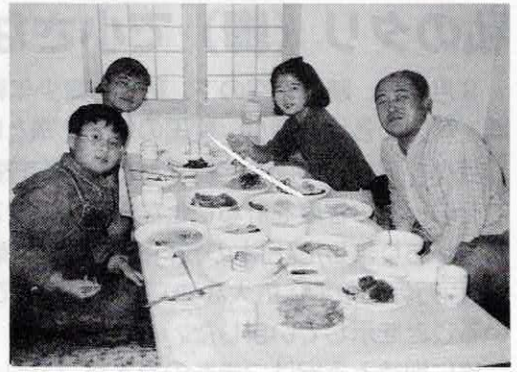
平成8年度韓国派遣団 藤田 宏美

9月4日から15日間、私は韓国派遣団として韓国を訪れました。その中で一番印象に残っているのは、やはり蔚山での民泊です。私のステイ先は、お父さん、お母さん、小学5年のカラム君の3人家族で、そこにもう一人の団員と私がお世話になりました。

韓国語の全くできない私は、覚えたての韓国語、身振り、日本語を交えて必死。それでもわかりたい、伝えたいという強い気持ちがあれば通じるものです。通じたことがわかったとき、本当にうれしさもひとしおでした。ステイ中には、ピクニックにも行きました。また街をぶらぶらしたり、スーパーに買い物に行ったり、お母さんの友達の家に遊びに行ったりと、2泊3日という短い日程ではありましたが、普段の生活を体験させてもらえる貴重な機会でした。

街の様子も似ており、文化も似ていると言われる日本と韓国。けれどもよく見てみると、習慣など違うことにも気がきます。それがどんなに小さなことであっても、それを知ることがお互いを理解することに繋がるのではないのでしょうか。似ているというのは同じということではありません。似ていると言われるだけに、小さな誤解が大きな壁になってしまうように私は思うのです。

この度参加させていただいて、韓国を知ることだけに留まらず、団員同士の交流も深めることができ、また自分自身のことを考える機会にもなり、良かったとも思います。ここで作ることでできた韓国との繋がり、人との繋がりを大切にしていきたいと思います。



再認識した異文化体験

平成8年度韓国派遣団 石津 知映

今回訪韓したことで理解を深めたことといえば、「そこに行かなければ感じ得ない異文化の体験」である。

私の持論に、「どんなに外国語を巧みに操れても、相手の文化背景を理解できるだけの広い許容範囲を持ち得なければ、その言語は生きてこない」というものがある。しかし、理解するにも当然限度はある。では、その限度を更に超えるためには何が必要か。それが「現地での経験」である。国内外問わず、異質との経験を交えた者なら、「えっ、そうなの?」「へえ! そうなんだ」と感じたことは少なくないはずだ。所謂カルチャーショックというやつだが、これは異質との対面により生じるものである。そのとき、どれだけ偏見や先入観を持たずに異質を受け入れられるかが重要なことであり、かつ個人の許容範囲を一層広げ得る要因となり得るか、ということをも前述の持論に付け加えたい。つまり、異質との共存には、広い許容範囲が必要であり、更にそれを広げるための意識や努力も不可欠である、ということなのだ。

何でもかんでも異文化として受け入れろ、と言っているのではない。それぞれの国や地域にはそこに住む人々が作り出した雰囲気や、暗黙の了解で行われているルールなどがある。それらを見たり軽んじたりしているような鈍いアンテナを持たたらどんなに素晴らしいことか。「再認識した異文化体験」とは、いわば理論と実用のバランスである。どちらかに偏ってしまえば、自分の持つ限界を突き破ることは難しいと私は思う。

それぞれの文化を受け入れるためには、カルチャーショックは不可避であり又、不可欠でもある。今回の派遣を通じ、それを恐れぬだけの許容範囲にまで自分の限界を広げることができたことを自負しており、又、今回非常に貴重な体験ができたことを心から感謝している。

Travel



私のタリ（脚）で小さなタリ（橋）を

韓国派遣団 矢野 智子

9月4日、晴天の空の下、私たち青少年韓国派遣団40名は金浦空港に降り立ちました。それから、15日間、韓国の各地を回り、韓国の魅力を嫌というほど知らされたのでした。

我々がアジアの国々を旅するとき、必ず感じるのがかつての日帝時代の日本が行った行為の数々です。各国でその行為の程度を計ることなど毛頭できませんが、私が訪問した韓国においても、戦争が残した爪痕は深いものがありました。日本の教科書における韓国歴史の歪曲事件をきっかけに民間レベルでの募金活動によって、百万坪の敷地に広大な独立記念館が建てられたことは、韓国の人々のなかに忘れ得ぬ事実が脈々と流れていることを示していました。

旅に期待と不安はつきものですが、わたしはまた別の意味の不安を抱えていました。韓国人は日本人を恨んでいないだろうか、ということです。戦後50年を超え、戦争を知らない世代も増えてきてはいるのですが、日本人というだけで、アレルギーを起こしてしまう人はいないだろうか。そんな人々に私ができることはあるのだろうか、とっていたのです。

しかし、そんなことはたった一人の韓国の人と接するだけで解決する問題でした。韓国の人々は私を無条件に受け入れてくれました。それどころか、私は逆に私のなかに潜む韓国に対する先入観に気付いたので。すなわち、上に挙げたような不安は聞いたことも感じたこともない全くの虚偽でしかなく、私はそんな実態のない影のようなものに一喜一憂していたのです。

しかし、これは私に限った問題でしょうか。私がこのような考えに至った土壌は共通のように思います。私はこれから私が実際見た、あるいは感じた事実を私の周りの韓国アレルギーの人々に伝えていきたいと思うのです。私のタリ（脚）で日韓に架かる小さなタリ（橋）を増やしていきたいと思っているのです。

新たなステップへ

青少年育成交流 ネパール派遣団 三宅 仁美

ヒマラヤ・クマリ・トレッキング・・・ネパールといえばありきたりのことしか知らなかった私。初めての訪問に加えこの予備知識のなさ、不安が全くなかったといえば嘘になる。しかし、このような不安も、トリブヴァン空砦での“ナマステ”という一言で一掃された。3週間という短い期間であったが、数々の医療期間、教育施設などを訪問した際の質疑応答を通じて、一筋縄では行かない“ネパール事情”をつぶさに見て知ることができた。

様々な訪問先の中で、とりわけ印象的であったのは、トレッキングで訪れたダンプス村である。トレッキングの最中に目にする素晴らしい眺め、プラネタリウムのような満天の星空、キャンプでの生活、村の学校で各団員が1学年ずつ受け持った“先生”としての一時間・・・何ものにも変え難い経験となった。

インドと同様に根強く現存するカースト制度。一見するとあっそうと木が生繁った山に見えて、実は木がない山が象徴している新林の喪失。大気汚染に水質汚濁etc...ネパールが抱えている問題はあまりにも多すぎて、その全てを把握することはできなかった。だが、これから理解していくための良いステップにはなったと思う。このステップを更にもう一段積み上げていけるようになりたい。



ブラジルの自然時計

青少年育成交流 ブラジル派遣団 宇滝 千代子

9月21日、私達ブラジル派遣団は、マント・グロソ州の州都であるクイアバをバスで出発し、赤土デコボコの本道を約5時間走り続けパンタナールへ到着しました。パンタナールは地球上最後の生命の楽園といわれている大湿原で、乾季は6～10月、雨期は11～5月。今回私達が訪れたのは乾季でしたが、それでも大地は湿原の面影を残しており、道路の両側には所々沼地が顔を出していました。ここではピラニア釣り、乗馬、朝5時に起きて日の出と鳥の目覚めの瞬間を見にボートで出かけるなど本当に大自然の雄大さを体感できまし

た。私が今回の旅で心に残った言葉は、あるブラジル人が言った、“日本人は時間に支配されているが、ブラジル人は時間を支配する”というものです。日本人は時間に正確であり、時間内に滞りなく物事が終わればよしとする傾向がありますが、ブラジル人は時間内に終わらなくても、コミュニケーションを深め、本音で話し合い、結論を出そうとするのだということです。短所は長所に、長所は短所になり得ますが、互いに学びあい、成長していけるようにこれからも交流を深めていければと思います。

日本・中国青年親善交流事業

9月7日から25日までの21日間、中国を訪れて多くの貴重な体験をされた『日本・中国青年親善交流事業』の参加報告を焼野嘉津氏に書いていただきましたので、今回と次回の2回に分けて掲載したいと思います。

北京

- 9/7 (土) 北京動物園、中華全国青年連合会歓迎会
- 9/8 (日) 桃林村 [開発概要の視察]、万里の長城
- 9/9 (月) 抗日戦争記念館 盧溝橋、天壇公園、人民大会堂 [呉学謙氏との会談]、京劇鑑賞
- 9/10 (火) 故宮、天安門広場、日本大使館、王府井

北京市街は数年前に比べ建築ラッシュも一息ついたという感じで、郊外への高速道路や高層ビルの建設が随分進んでいた。自家用車の保有台数が急激に増加したということで、市街地の混雑は相当のものであった。車は日本車がやはり目立ち、エステマやRVが目立った。もちろんドイツ車も多く道端で車を洗う姿がよく見られ、ステイタスシンボルとしての車の位置づけが感じられた。

市内の一般住宅は、まだ昔ながらの煉瓦造りの家が多く、わき道に人と自転車があふれている状態は変わらない。ただし、改革開放政策による高額所得者の増加は著しく、郊外では高層のアパートが随分と多く建てられ、別荘あるいは定住型の一戸建住宅は日本のモデルハウスのような斬新なデザインで、購入価格が日本円で1,000万~2,000万ということであるが、需要が多いということである。

受け入れ主体の中華全国青年連合会は、中国全土にわたる組織で、共産党青年会を基盤にして経済・文化・教育・国際交流と多くの分野に支配力を持っている。特に北京では、国家対国家の意識が強く、日本との相互交流においても過去の戦争の歴史認識についてのコメントは必ず出され、人民大会堂での会見では、名指しで靖国参拝への懸念を表明していた。

抗日戦争記念館での展示は確かに刺激的なものであったが、最終的に過去の歴史を認識し、次の時代を共に築いていこうというスローガンで終わっており、次の時代への相互理解の上での青年交流の重要性は会う人全てが認識し、公言していることに中国の改革開放政策の定着を感じさせられた。



青海

- 9/11 (水) 青海省人民政府、青海省青年連合会歓迎会
- 9/12 (木) タルジ (ラマ教総本山・スーカバの生地) 青海湖 (標高3300m)、チベット族青年との交流
- 9/13 (金) 青海湖遊覧、草原観光、日月山 (唐とチベットの境界)
- 9/14 (土) 土族 (120万の最少の少数民族) との交流
- 9/15 (日) 空路 西安へ (プロペラ機)

いわゆる西域への玄関口にあたる青海省の西寧市は、中国のほぼ真ん中に位置しており、チベットや新疆への起点になっている。55の少数民族で構成されているこの省では、中国の共産支配を維持していくためにも少数民族政策は大変重要な課題であることが伺える。ラマ教寺院への補助や少数民族の文化伝統の維持などにその一端を見ることができた。青年連合会幹部にも土族やチベット族の出身者もあり、家族構成も多様な民族で構成されているケースも多い。漢民族では一人っ子政策が徹底されているが、少数民族ではその制限が除外されている。

西寧市で標高2200mと高地であり、乾燥地域であるため体調には十分な留意が必要であった。青海湖畔での1泊は広大な草原の広がりや澄みきった冷気で大変気持ち良かった。日月山は富士山と河原な高地であったが、近郊の山の頂上近くまで耕作が行われており、また電線の架設が村々まで行き届いている有様にこの国の力の大きさを感じさせられた。

村々の耕作は麦が主体であったが、30数年前の日本の農村を思い起こさせるような懐かしい風景であった。時間が悠然と流れ牧畜の民は限りなく自由な風情であった。(羊1頭400元、数百頭を有する彼等は大金持ち)

昔は訪問者に馬一頭を送った名残として、白い絹のマフラーをかけてくれる。さらに歓迎の意味で3杯の白酒(50~60度)を飲み干さなければならぬ。これも伝統的な習慣として受け入れなければ失礼と、地元の幹部ともどもおつきあいしていると1本以上飲んでしまった。(さすがにのびました。)

2000年以上も伝わってきた伝統衣装と文化、土族の村では子供たちとの交流を含め、初めての日本人を迎え一杯の歓待を受け、相互の良き交流がはかれました。

● 10/25～28 日韓青年親善交流

Information Board

● 11/29～12/1 第12回全国大会 in 宮崎「シーガイアで遊ぼう！」
近畿IYEOのメンバーで航空券を安く買ってみんなで行こうという計画があります。興味のある方は、松本（06-761-3257）まで。

● 12/11（水） ～これから活動を始めたい人のために～

『国際交流フォーラム』

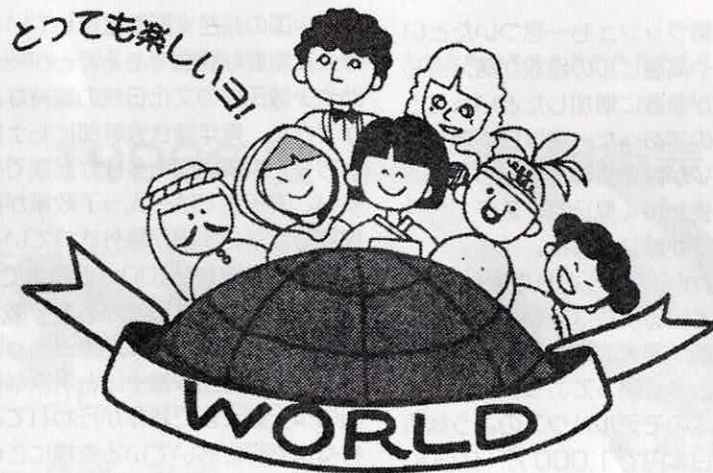
時間 PM6:00～9:30

プログラム 一部 基調講演（上村文三氏）及び海外派遣事業参加者の帰国報告会
二部 情報交換会

場所 プラネット・ホール（プラネットステーション4F）

入場無料 / 先着順 140名様（情報交換会は1,000円が必要です）

申込・問い合わせ 大阪府青少年課 育成係
TEL 06-941-7634 FAX 06-944-6649



平成8年度 会費納入のお願い

平成8年度は、今回が初めてのみおつき発行となりますので、当然の如く会費がほとんど集まっておりません。今後も皆さんに会報を送り続けたり、いろいろな企画を立てていくためには、やはり会費が不可欠です。ぜひ、同封の振込用紙でお振込のほう、よろしく願い申し上げます。一番大変な仕事を引き受けて下さっている財務部長の川上隆司氏を助けるためにも、皆さん、会費はお早めに（！）お願いします！

青 春 後 記

日韓青少年指導者交流事業で韓国へ行かせていただきました。ソウルでの歓迎会、清州でのホームステイや小学校訪問、独立記念館見学、仁川での指導者及び日本語学校の生徒さんたちとの交流・キムチづくり等など・・・楽しい思い出をいっぱい作って帰ってきました。竹島（独島）問題、北朝鮮問題などについて聞かれたり、日帝時代のことについて逆に聞いたりしましたが、もちろん、過去に起こしたことは起こしたこととして認めた上で、今の私たちにできることは、ひとりひとりが一人でも多くの人と良い関係を築いていく事しかないのではないのでしょうか。みなさん、勇気を持って韓国や中国などのアジアの国々を訪れてみましょう。そして、日本を、あなた自身をわかってもらいましょう。そして相手をわかろうとすればきっと、何かなつかしいあったかいものに出会えます。「ケンチャナヤ！」 OH! NO!